



2011 年度公共ホール公演事業
Yame Piano Project
ベーゼンドルファー学外セミナー報告書

講座の名称	Yame Piano Project ベーゼンドルファー学外セミナー
講 師	松尾 卓美 (株式会社 B-tech Japan 西日本技術部統括部長、コンサートチューナー)
実施日時・期間	2011 年 6 月 4 日 (土) 10:00-12:00
実 施 場 所	B-tech Japan Osaka 内スタジオ (大阪市淀川区宮原 2-14-4 MF 新大阪ビル 1F)
参加者数	計 14 名 (学生 9 名、教員・スタッフなど 5 名)

< 講座概要 >

セミナーは、まずピアノの歴史を知ることから始まった。チェンバロから始まりフォルテピアノを経て古い時代のピアノは誕生するが、それらは全て木で作られていた。木製のピアノは、木に共鳴して生まれる独特の音色 (ウィンナートーン) を生むが、ベーゼンドルファーは今も昔も変わらずこの音色を重視し、こだわり続けている。



ウィンナートーンを生み出すには数々の要素があるが、中でもスプルース (松) の使用は特筆すべき事項で、音量や音色を求める理由で他のピアノメーカーがリム (外枠) や支柱に異なる種類の木や金属などを使用するのに比べ、ベーゼンドルファーはこれらにもスプルースを用い、とにかく楽器全体 (=木) を共鳴させることを追求している。他にも、通常折り返して張られる 3 本の弦を 1 本ずつかけていく特殊な張り方や、インペリアルエクステンド・キーの存在、音が切れすぎず敢えてピアノの中に残るように調整されているダンパーなどの特徴があるが、これら全てがベーゼンドルファー特有の、深みと温もりのある音色を作る上で欠かせない大事な事柄となっている。また、ベーゼンドルファーのピアノに付けられている識別番号は「製造番号」ではなく「作品番号 (Op.)」と称されており、これはベーゼンドルファーの製造に携わる人々が、いかにこのピアノに誇りを持ち、愛しているかをよく物語っている。

会場にはベーゼンドルファーのピアノ数台に加えて、チェンバロ、古い時代のピアノ (フォルテピアノの様式を留めたピアノ) が置かれており、学生たちはレクチャーを受けながら、それぞれの内部構造を見たり、時には実際に弾いて確かめたりすることで、それらの違いや特徴を体感することができた。

セミナー中には随所で学生らからの質問も挙がり、ベーゼンドルファーを演奏するコツは? という問いかけには、「よくく鳴らない」と言われるベーゼンドルファーだが実際はそうではなく、弦の響きが



木枠や足に至るピアノのあらゆる部位に共鳴することで、かえって繊細なピアニッシモすら遠くに伝えることを可能にしている。演奏をする際には、演奏者の位置での音の鳴り方に頼るのではなく、ホール後方など、遠くで音が鳴っているイメージを持って臨むことが大切だ」とアドバイスを貰った。